

# 大学生のアパシー傾向と UPI (University Personality Inventory) との関連

## The Relationship between UPI (University Personality Inventory) and Apathy Tendency

箭本 佳己 鈴木 由美

YAMOTO Yoshiki, SUZUKI Yumi

### 要旨

本研究の目的は、大学で問題のある学生の早期発見のためのスクリーニングテストとして多く使われているUPI 学生精神的健康調査 (University Personality Inventory: 以下UPI) とアパシー傾向の関連を検討することにより、UPI実施時にアパシーの傾向を予測し、早期に介入するための手立てを考察することであった。大学生102名を対象に、入学時のオリエンテーションと前期終了時点で質問紙調査を行った。使用尺度は、UPI 学生精神的健康調査、アパシー傾向測定尺度であった。その結果、アパシー傾向測定尺度は「授業からの退却」「学業・課題からの退却」「学業への積極的姿勢」の3因子が抽出された。また、UPI とアパシー傾向測定尺度との関連を検討するために、UPI 諸変数を独立変数、アパシー傾向測定尺度の各因子を従属変数として重回帰分析を行った結果、「授業からの退却」因子には、「強迫傾向・対人関係念慮」因子から負の影響が、「学業・課題からの退却」因子には、「抑うつ傾向」因子から正の影響がそれぞれあることが明らかになった。これらの結果から、スクリーニングテストであるUPI からスチューデント・アパシーの傾向を予測できる可能性が示唆され、学生支援での早期介入の指標として活用できることが明らかになった。またこの結果をもとに、学生のニーズに合わせた介入方法が考察された。  
キーワード：スチューデント・アパシー、無気力、UPI

### 【問題と目的】

現在、大学教育において学生の退学・休学は大きな問題になってきている。内田(2011)によれば、2008年度の全国の退学者数は4,900人で全体の1.28%になるという。また、休学者は9,218人に上っている。文部科学省(2014)の発表では、2014年の国公立大学・私立大学・公私立専門学校などを対象にした調査結果で中途退学者総数は79,311人(2.65%)、休学者は67,654人(2.3%)であり、前年よりも増加していることを指摘している。これらの調査を見ると、調査母体が異なるため単純に比較することはできないが、ここ数年の間にも退学者の割合は増加していることがわかる。近年の学生支援の現状から見ても、学生の大学生活からの撤退は大きな問題になっているのである。

このような問題の背景には大学進学率や学生の意欲の問題、経済的要因、アイデンティティの確立などの発達の要因、精神疾患の増加など様々な要因が考えられるが、その中の大きなものにスチューデント・アパシーが挙げられる。スチューデント・アパシーとは、「①精神病の無気力と異なる②心理的原因から生じる③主として学生の本業とされる学問に対しての意欲の減退を示す。」(西村, 2012) 状態のことである。内田 (2011) は、全国の大学生を対象に、休・退学に関する大々的な調査を行った。その結果、退学の理由に関しては、進路変更や経済的理由などもある中で、約半数が学業への意欲の減退やスチューデント・アパシーのような無気力感を伴う「消極的理由群」であることを明らかにしている。また溝上 (1996) は、アメリカの大学生との比較の中で、日本の大学生は「高等教育の大衆化」により、大学生自身の問題として、学習意欲が低く、学業以外の活動に熱中する学生の存在を指摘している。臨床的場面においても、スチューデント・アパシーの様相を呈する学生が多くいる。筆者が学生相談場面でカウンセリングを行う学生の中には、「親や先生から勧められて大学を選じた」「大学に来て特にやりたことがあるわけではない」「とりあえず大学に来たものの、何をやらいいかわからない」などを主訴に来談する学生も多い。これらの学生は、授業や学業への動機付けが低く、授業に行っても単位を取るだけのために出席している、授業に行くことが苦痛になる、次第に授業に行かなくなるといったプロセスを経ながら、留年を繰り返していくのである。このような学生たちは、将来の休学・退学の予備軍であり、それらを予防するためにも早期に個別支援につなげ、その学生のニーズに合った支援を行うことは大学教育の中でも大きな課題なのである。

スチューデント・アパシーについては、学生支援に関して1960年代からの中心的な概念であり、これまで多くの研究知見が蓄積されてきた。スチューデント・アパシーの概念に初めて言及したのはWalterである。Walter (1961) は、青年期後期の男子大学生に現れる特徴的な無気力感に着目し、それらを抑うつや神経症など精神的な疾患とは区別し、発達上誰にでも起こりうる心理的な障害であると位置付けた。彼は、アパシーの様相を呈する学生の背景に、現実には迫っている敗北や失敗などへの恐れ、競争からの逃避が共通してあることを指摘し、無気力状態を青年が用いるある種特殊な状況に対しての正常な心理的防衛反応の一つであるとしている。そして、そのような学生たちは自分たちで決定し責任を負わなければならない場面を避け、問題に直面化しようとしないうることに対応の難しさがあることを指摘している。また、この反応は男性特有のものであり、青年期後期の男性性の確立の中での葛藤に対する反応であることも指摘している。日本においても同様の傾向を持つ学生の存在は多く指摘され問題視されている(鉄島, 1993; 下山, 1995; 下山, 1997. etc)。下山 (1997) は、自身の臨床経験をもとにアパシー傾向のある学生を行動、心理、性格の次元から分類する3次元モデルを提唱し、その対応として、「つなぎモデル」を開発した。スチューデント・アパシーの学生は①人間関係の中で悩めないこと、②悩むより回避という行動化を選ぶこと、の2点が対応する際に援助者が介入することを難しくし、悪循環に陥らせていることに着目し、援助者が彼らの関係性を再構築しながら安心できる関係性を提供することで、悩めるように援助していくのである。このように、アパシー傾向はその学生の将来や大学生活において大きな問題になるものの、危機的状況は“悩めない”傾向を持つ本人には自覚されにくいことがわかる。また、その状況を本人以

外の周囲の人間が認識する、つまり教職員や保護者、カウンセラーなどが問題に気づき支援につながるのは「単位を落とし続ける、授業に欠席し続ける、卒業後の進路を決定する」など具体的に問題が顕在化する時期であり、早くても大学2年生あたりとなるだろう。しかし、その時にはすでに問題が深刻化しており、支援にも大きな力と時間がかかることが多い。スチューデント・アパシーの心理的援助には長期的な介入が必要であることから、大学でのスチューデント・アパシー傾向を持つ学生の支援を考える際、これらの学生を早期に発見し、どのように支援のルールに乗せていくかということは大きな課題なのである。

一方、大学でも学生への休・退学に対して予防的な様々な取り組みを行ってきている。その最も大きなものが入学時に行われるスクリーニングテストである。特にUPI 学生精神的健康調査 (University Personality Inventory) は国公立大学を中心に、学生の精神的健康状態の把握と、予防的介入の指標として多く活用されてきている。UPI とは、大学の新生を対象にして、問題を抱える学生の早期発見、早期治療を目指し、神経症、心身症、学生の悩みや迷い、不満や葛藤などの実態を調査するために全国大学保健管理協会が1968年に開発したスクリーニングテストである (松原、2009)。入学初期に簡易的に実施し、不適応の可能性や個別に支援の必要な学生を早期に発見し、学生相談などの個別面接につなげることを目的として活用されるツールである。岡ら (2015) や宮下ら (2009) のように永年その大学でのデータを蓄積し、学生のメンタルヘルスを経年的に把握しようとする試みや、多くの大学で使われているという強みを生かし、吉武 (1995) のように他大学との得点の比較から、大学の学生の傾向を客観的に把握し、学生支援に生かすなど、大きな視点での学生の精神的傾向の実態把握の指標としても利用されている。さらに、UPI と学校生活満足度や学生相談利用状況との関連性を明らかにしたもの (武蔵ら、2012) や実際の退学した学生のUPIの特徴を明らかにしたもの (小塩ら、2007) のように、他尺度との関連を検討することで、従来のスクリーニング機能だけでなく、より詳細なアセスメントを行い支援に繋げようとする試みなど、各大学で様々な形で活用されているのである。吉武 (1995) はスクリーニングテストの効用として①学生の実態把握、②相談・受診のきっかけ、③適応障害の早期発見などを挙げている。これまでの各大学の取り組みを見ると、上記のような意味で一定の効果が示されており、UPIの活用は大学における学生支援の有効なツールとなっていると言える。

しかし、これらの介入はあくまで新生の入学時点での不適応に対するの予防策であり、その後の学生の意欲低下を予測できるものではない。特に新生は高い意欲と希望を持って入学して来ており、早期に行う心理テストやオリエンテーション、健康診断時に実施する呼び出し面接のみではその後のアパシーの傾向を予測することは難しく、必要な介入が遅くなってしまふ。そこで本研究では、各大学で入学時のスクリーニングテストとして一般的に使われているUPIと、その後のスチューデント・アパシー傾向の関連を検討し、より早期にアパシーの予防的な支援を行うための指標とすることを目的とする。また、本研究の結果を活用した学生への具体的な介入方法も合わせて考察することとする。

## 【方法】

(1) 調査対象：T大学において、新入生対象オリエンテーション時に実施したUPIを受験したもの、および心理系教養科目を受講している学生102名（男子26名、女子76名）を対象とした。なお、本研究では大学入学時の精神的な健康状態がその後のアパシー傾向に与える影響を検討することを目的とするため、調査対象は1年生に限定した。

(2) 尺度：①アパシー傾向測定尺度（鉄島、1993）：スチューデント・アパシーの測定には、鉄島（1993）が作成したアパシー傾向測定尺度を使用した。この尺度は、スチューデント・アパシー傾向を「精神病の無気力と異なり、心理的原因で主として学生の本業である学問に対して意欲の減退を示すこと」と定義して、これまで臨床的に治療が必要な無気力傾向の学生とスチューデント・アパシー傾向の学生を明確に分けた形で作成された尺度である。各項目において「1. なかった」～「5. いつもあった」の5件法ではまる番号に○をつけ、「1. なかった」「2. ほとんどなかった」「3. ときどきあった」「4. しばしばあった」「5. いつもあった」の順に1点～5点として合計得点を算出する。主に学校、授業、学生生活からの退却の度合いを測定することができる尺度である。橋本（2002）は、この尺度をさらに厳選し23項目の尺度を作成した。本研究でもこれを参考に23項目の尺度を採用した。また、鉄島と橋本の因子分析の結果が一致しないことから、各時代によってアパシーの構造も変化することが考えられるため、本研究では改めて因子分析を行い、尺度の因子構造を再検討する。

②UPI学生精神的健康調査（全国大学保健管理協会、1968）：UPIは、大学生の精神的な健康状態をスクリーニングするために作られた全60項目からなる2件法の尺度である。UPI得点は、各項目に該当するものに○をつけ、「はい」が1点、「いいえ」が0点として、その個人の合計得点を算出する。その際、尺度検証機能を持つ「陽性項目」4項目を除いた56項目の得点を合計する。この56項目の合計得点が、学生の悩み、心配事、不安、迷い、葛藤などの「自覚症状」に関する項目とされる。なお「自覚症状」56項目のうち、「1. 食欲がない」「8. 自分の過去や家族は不幸である」「16. 不眠がちである」「25. 死にたくなる」の4項目は、特に全体の中でも注意が必要な「key項目」となる。「自覚症状」および「key項目」は得点が高くなるほど精神的健康が良くないことを示している。本研究では「自覚症状（56点）」「key項目（4点）」の得点を検討する。

また、UPIの質問項目はその訴えの内容によって、「精神身体的訴え」16項目、「うつ傾向に関するもの」20項目、「対人面での不安に関するもの」10項目、「強迫的傾向や被害・関係念慮に関するもの」10項目の4因子に分類されることが指摘されている（吉武、1995）。本研究においても、学生の精神的健康状態を検討するために、この4分類からUPIを検討することとする。

(3) 調査時期と手続き：2016年4月、新入生を対象としたオリエンテーションの中で健康診断の一環としてUPIを実施した。UPIの趣旨や情報の取り扱い方を説明し、健康診断の一環ではあるが回答は任意であること、同意確認は質問紙の提出によって行うことを事前に伝え調査を行った。所要時間は10分～15分程度であった。また、その半年後の2016年7月に心理系教養科目の講義においてアパシー傾向測定尺度を実施した。同様に、回答前に趣旨とデータの取り扱い方についての説明をし、回答は任意であること、調査は記名式であり同意確認は質問紙への回答および提出によって行うことを伝え実施した。両調査とも質問紙は、調査対象に一斉配布し、その場で回収が行われた。

【結果と考察】

1. 尺度の検討

1) アパシー傾向測定尺度についての因子構造と信頼性の検討

アパシー傾向測定尺度23項目について、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行ったところ3因子を抽出した。一つの因子に.400以上の負荷を示す項目をまとめたものをTable 1に示す。第1因子(F1)は「重要な授業にも、つい出る気がなくなって欠席してしまうことがあった」「なんとなく授業をさぼることがある」といった授業からの

Table 1 アパシー傾向測定尺度因子分析 (主因子法・プロマックス回転)

項目	F1	F2	F3
1 重要な授業にも、つい出る気がなくなって欠席してしまうことがあった	.903	-.088	.035
9 なんとなく授業をさぼることがある	.887	-.097	-.044
13 生活のリズムが一定しないために、午前中の授業は欠席しがちである	.733	.083	.055
5 出席が重視される授業でさえも休みがちである	.694	.161	.061
16 学校にいても、つい授業に出るのが面倒臭くなって欠席してしまうことがある	.689	-.041	.008
*20 授業は何よりもまず第一に優先している	-.592	.064	.090
8 授業に出席するよりは自分の好きなことをやっている方がいいと思う	.491	.188	.070
22 特別な理由がないのに重要な試験を受けなかったことがある	.422	-.095	.078
4 授業中に携帯でLineを送ったり、ゲームをする	.410	.114	-.068
7 注意を集中するのは他の人より苦勞する	-.130	.703	.141
12 「早く授業が終わればいい」としばしば思う	-.014	.589	-.090
23 学校での勉強もアルバイト活動もあまりやる気が起こらない	.052	.523	.012
3 ひとつの課題に打ち込むことができない	.003	.512	-.037
19 勉強に関する本を読んでいてもすぐに飽きてしまう	.075	.459	-.168
17 授業は積極的に参加するよりも、いつもただ座っているだけだという感じだ	.169	.438	-.109
6 勉強での疑問に思うときはすぐに調べる	-.095	.205	.782
2 教師に言われなくても自分から進んで勉強する	-.012	-.090	.541
21 時間を忘れて勉強することがある	.147	-.049	.536
10 授業で疑問に感じられる箇所があれば積極的に教師に質問に行く	.054	-.061	.487
14 授業で取り上げられた参考書には目を通す方である	.044	-.125	.447

\*は逆転項目

因子間相関	F1	F2	F3
F1	1.000	.427	-.122
F2	.427	1.000	-.475
F3	-.122	-.475	1.000

逃避行動を表す因子であると考えられるため、「授業からの退却」(9項目)と解釈された。第2因子(F2)は「注意を集中するのは他人より苦勞をする」「早く学校が終わればいいとしばしば思う」「ひとつの課題に打ち込むことができない」などの項目で構成されており、学業や課題からの逃避傾向が表れている因子である。項目の構成を見ると、橋本(2002)が行った因子分析のなかでの「学業からの退却」因子と「課題からの退却」因子の両方の因子の項目で構成されている。このことから「学業・課題からの退却」(6項目)と解釈された。第3因子(F3)は「勉強での疑問に思うことはすぐに調べる」「教師に言われなくても自分から進んで勉強する」など授業、学業への積極的な行動をあらわしている「学業への積極的姿勢」(5項目)と解釈された。なお、項目11、15、18はどの因子にも十分な負荷量を示さなかったため、分析から除外した。

次にアパシー傾向測定尺度の下位尺度についての信頼性を検討するために $\alpha$ 係数を測定した。その結果、「F1. 授業からの退却」因子は $\alpha=.871$ 、「F2. 学業・課題からの退却」は $\alpha=.735$ 、F3. 「学業への積極的姿勢」は $\alpha=.707$ の値を示しており、信頼性は十分に高い値を得られた(Table 2)。

Table 2 UPI およびアパシー傾向測定尺度の平均値と標準偏差

		平均値	標準偏差	$\alpha$ 係数
UPI	自覚症状	17.11	9.87	0.913
	key 項目	0.52	0.85	0.510
	陽性項目	1.28	1.23	0.589
UPI・訴え症状	精神的訴え	3.83	2.99	0.750
	抑うつ傾向	6.93	4.03	0.804
	対人不安	3.72	2.51	0.767
	強迫傾向・被害関係念慮	2.62	2.08	0.670
アパシー傾向測定尺度	授業からの退却	18.99	6.56	0.871
	学業・課題からの退却	17.52	3.81	0.735
	学業への積極的姿勢	13.36	3.26	0.707

学生のアパシー傾向を測定する際の尺度としては、本研究で使用した、鉄島(1993)のアパシー傾向測定尺度や下山(1995)のアパシー心理性格測定尺度などが用いられることが多い。これらの研究からは共通して大学の各場面からの退却の因子(「授業からの退却」「学業からの退却」「大学生活からの退却」)が得られている。本研究からも「授業からの退却」「学業・課題からの退却」の2因子は先行研究と同様であったが、「大学生活からの退却」の因子は見出すことができなかった。これは、授業・学業・大学生活といった先行研究での場面わけが、現代の学生にとっては曖昧になってきているからだと考えられる。

## 2) UPI 学生精神的健康調査

学生の精神的傾向について検討するためにUPIの平均得点と標準偏差を算出した(Table 2)。各下位尺度の信頼性を検討したところ、自覚症状の信頼係数は $\alpha=.913$ 、key項目は $\alpha=.510$ 、陽性項目では $\alpha=.589$ 、であった。内容別では、精神的訴えは $\alpha=.750$ 、抑うつ傾向は $\alpha=.804$ 、対人不安は $\alpha=.767$ 、強迫傾向・被害関係念慮は $\alpha=.670$ であった。key項目において若干の低いものの、UPI及び下位項目についてはある程度の信頼性が確認された。なお陽性項目については、本来被験者が正直に答えているかを検証するた

めの項目であるため、本研究では分析から除外することとする。

## 2. アパシー傾向の男女差の検討

アパシー傾向に男女差があるか検討するためにt検定を行った。Walter (1961) や、下山 (1997) は、アパシー傾向は男らしさ形成に関わる青年期の発達の葛藤であり、男子学生特有の障害であることを指摘している。しかし、アパシー傾向はその時代や文化からの影響を受けやすいことも指摘されており (下山、1996)、また臨床的に見ても、女子学生においてもアパシーと思われる傾向を示すことがあることを鑑みると、下山らが指摘している時代と現代では性差の様相が変化していることが推測される。その結果を Table 3 に示す。

t 検定を行った結果は、いずれの因子でも有意な結果を得ることができなかった。これは、スチューデント・アパシーの傾向に関して性差が見られないことを意味している。石本ら (2009) は、大学生の心の居場所とアパシー傾向の関連性を検討するなかで、本研究同様、アパシー傾向に男女差が見られないことを報告している。また、西村 (2012) も大学生のアパシー傾向と大学観・アイデンティティとの関連を検討する中で同様の結果を示している。これらの結果をみると、アパシー傾向は、男性特有の発達の障害ではなく、男女ともに起こりうる青年期特有の心性であると考えられるのではないだろうか。90年代と比べると「男らしさ」「女らしさ」といったジェンダー的価値観は影を潜め観念上の男女の格差は少なくなっている。そのような文化で育った現代大学生にとってのアパシー傾向の背景は、Walter (1961) の指摘するような「男らしさ」の発達からの逃避ではなく、もっと別の役割、例えば卒業して社会に出ることからの逃避といったような男女がともに直面するようなものが存在する可能性がある。その意味で、今後大学生のアパシー傾向を現代青年に合わせて捉え直していくことが求められるのではないだろうか。

Table 3 アパシー傾向測定尺度の下位得点の男女差の検討

		男性	女性	t 値
アパシー傾向測定尺度	アパシー傾向全体	53.84 (9.43)	52.5 (10.12)	0.761 n.s.
	授業からの退却	20.29 (6.74)	18.55 (6.43)	1.548 n.s.
	学業・課題からの退却	17.47 (3.75)	17.55 (3.85)	-0.118 n.s.
	学業への積極的姿勢	13.26 (3.90)	13.35 (2.99)	-0.157 n.s.
UPI	key 項目	0.53 (0.85)	0.52 (0.85)	0.062 n.s.
	精神的訴え	4.11 (3.32)	3.32 (2.90)	0.552 n.s.
	抑うつ傾向	7.46 (3.52)	6.76 (4.22)	0.757 n.s.
	対人不安	4.34 (2.26)	3.47 (2.56)	1.539 n.s.
	強迫傾向・対人関係念慮	3.03 (1.92)	2.47 (2.13)	1.191 n.s.

( ) 内は標準偏差

\*\*\* :  $p < .001$

また、UPI 下位因子に関しても同様に性差を検討するために t 検定を行った。結果を Table 3 に示す。UPI に関しても、性差は見られなかった。

以上のことから、アパシーの傾向、UPI には性差が見られず、男女で同様の傾向を示していることが明らかになった。以後の分析でも、男女に違いがないものと解釈して分析を進めることとする。

### 3. アパシー傾向測定尺度と UPI との関連の検討

#### 1) UPI 諸変数とアパシー傾向測定尺度の各因子間の相関関係

UPI とアパシー傾向の関連を検討するために、UPI の諸変数とアパシー測定尺度の下位尺度との間の Pearson の積率相関による相関係数を求めた。結果を Table 4 に示す。F1: 「授業からの退却」は、自覚症状、key 項目、精神的訴え、抑うつ傾向と有意な正の相関があった。しかし、その程度は弱いものであった。F2: 「学業・課題からの退却」は、自覚症状に .33、key 項目に .33、精神的訴えに .20、抑うつ傾向に .41、対人不安に .24 の有意な正の相関があった。特に、抑うつ傾向とは中程度の相関を示し、心理的に抑うつな傾向と学業へ向かおうとする意欲の間に関連性があることが明らかになった。F3: 「学習への積極的姿勢」は、UPI 諸変数との有意な相関を得ることができなかった。入学時の精神的な様相と学習へ向かうための積極的な行動の間には関連性が薄いということが明らかになった。

これらの結果から、スチューデント・アパシーの傾向を見ると、授業からの退却や学業からの退却などネガティブな部分に関しては UPI との関連性が示され、予防的な介入を行うための指標となることが示唆された。それに対し、「学習への積極的姿勢」のようなポジティブな要因に関しては UPI で予測することは難しく、学生への意欲を高めるための介入を行う際には、さらに別の要因を検討する必要性が明らかになった。

Table 4 アパシー傾向測定尺度下位尺度と UPI 諸変数の相関係数

		UPI 諸変数					強迫傾向・被害関係念慮
		自覚症状	key 項目	精神的訴え	抑うつ傾向	対人不安	
アパシー傾向 測定尺度	授業からの退却	.230*	.291**	.243*	.248*	.160	.079
	学業・課題からの退却	.326***	.328***	.204*	.417***	.235*	.174
	学業への積極的姿勢	-.049	.004	.016	-.121	-.006	-.015

\*\*\*:  $p < .001$ , \*\*:  $p < .01$ , \*:  $p < .05$

#### 2) アパシー傾向に対する UPI 諸変数の影響の検討

入学時に実施した UPI の得点からその後のアパシー傾向を予測できるか検討するために、アパシー傾向測定尺度の下位因子を従属変数、UPI の下位因子を独立変数として重回帰分析を行った。本研究では、UPI からアパシー傾向が予測できるか検討することが目的であるため、強制投入法による分析を実施した。なお、UPI の「自覚症状」得点は他因子の総合得点であり、独立変数に加えることにより決定係数への影響が懸念されるため、本分析からは除外した。また、アパシー傾向全体との関連も検討するために、新たに「アパシー傾向全体」得点を算出した。これは、アパシー傾向尺度の各項目と、他の因子と負の相関を持つ F3 「学業への積極的姿勢」因子の項目を逆転項目として、集計し算出した。



また、独立変数であるUPIの下位因子で性差が見られなかったことから、男女込みで分析を行った。結果をTable 5に示す。これから述べる結果には、重回帰分析により有意な結果が得られた因子のみを取り上げる。

「アパシー傾向全体」においては、決定係数は $R^2=.172$ であり、1%水準で有意であった( $F(5,91)=3.791, p<.01$ )。また、UPIの抑うつ傾向から中程度の正の影響を受けていることが明らかになった。

「F1. 授業からの退却」因子においては、決定係数は $R^2=.135$ であり、5%水準で有意であった( $F(5,94)=2.492, p<.05$ )。この因子においては、「強迫傾向・対人関係念慮」から負の影響を受けていることが明らかになった。これは、入学時の「強迫傾向・対人関係念慮」の傾向が強い学生ほど授業への退却の度合いが少ないことを表している。分かりやすく言うと、「～しなければならない」という認知や「こだわりの強さ」といった強迫傾向が強く、他人の視線が気になる、周囲のことが気になるなどの対人関係を気にすることの多い学生は、授業をサボることが少なかったということである。この傾向は、結果だけ見ると、授業への出席が良く一見適応的な学生に見えるかもしれない。しかし武蔵ら(2012)は、学校心理学で言う二次的援助サービスが必要な「非承認群・侵害行為認知群」と三次的援助サービスが必要な「学校生活不満足群」に関して、適応的な「学校生活満足群」よりも「強迫傾向・対人関係念慮」得点が高いことを指摘している。つまり、見かけ上は授業をサボることが少なく適応的に見える学生でも、「強迫傾向・対人関係念慮」が高い学生は、その出席する動機は必ずしも積極的なものではなく、授業には出席しなければならないといった強迫的な認知や他人からよく見られないかもしれないといった不安のような消極的なものである可能性が高く、早期に個別介入を要する援助ニーズを持った学生なのである。

「F2. 学業・課題からの退却」因子においては、決定係数は $R^2=.210$ であり、0.1%水準で有意であった( $F(5,95)=5.035, p<.001$ )。また、「抑うつ傾向」からの中程度の正の影響を受けていることも明らかになった。これは、入学時に抑うつ傾向の症状を表している学生ほど、その後の学業への意欲の低下、学業へ取り組む時の消極的な姿勢や課題への逃避傾向が見られることを表している。UPIの実施時期が入学次のオリエンテーション、アパシー傾向測定尺度の実施時期が前期の終了後であり、時間的な要因を考慮に入れると、入学初期に精神的な不適応傾向、特に抑うつ的な症状を訴えている学生は、その後の大学生活を送る中でも改善されることは少なく、結果的に学業への取り組む姿勢に負の影響

Table 5 アパシー傾向尺度下位因子とUPI との重回帰分析

	アパシー傾向全体	下位因子		
		F1: 授業からの退却	F2: 学業・課題からの退却	F3: 学業への積極的行動
key 項目	.168	.204	.208	.090
精神的訴え	.077	.182	-.016	.065
抑うつ傾向	.444**	.213	.494**	-.358
対人不安	-.104	.034	-.048	.161
強迫傾向・対人関係念慮	-.237	-.311*	-.216	.030
$R^2$	.172**	.135*	.210***	.047 n.s.

\*\*\*:  $p<.001$ , \*\*:  $p<.01$ , \*:  $p<.05$

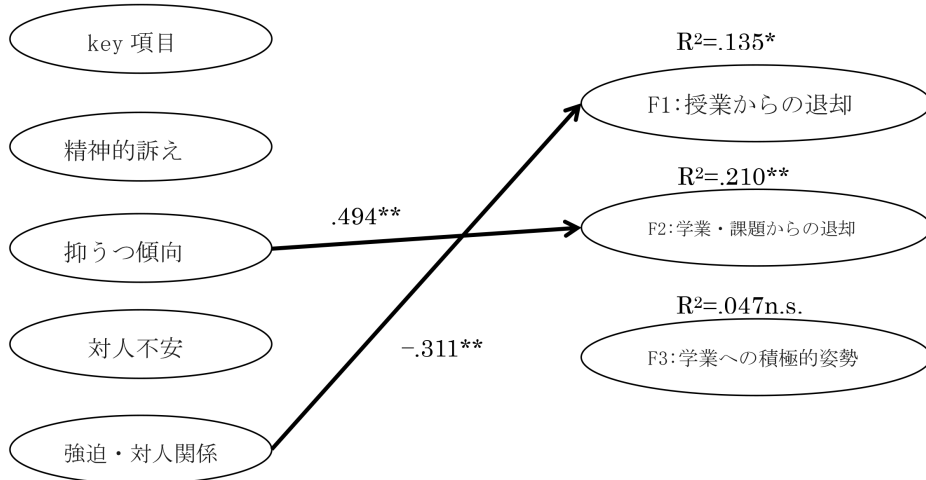


Fig. 1 アパシー傾向測定尺度とUPIにおける重回帰分析のパス図

響を及ぼすということが明らかになった。これら全体の分析結果を図式化したものを Fig. 1 に示す。

以上のことから、入学時に実施したUPIの結果とその後の大学生活でのアパシー傾向との関連性が明らかになった。スクリーニングテストとして実施されることのできるUPIの「抑うつ傾向」の得点は、アパシー傾向の中でも特に「F2：学業・課題からの退却」との関連性が強く、これらを活用することで早期にアパシーの状態を予測できる可能性を示している。UPIをアパシー傾向の予防に活用するという観点から考えると、学生に個別面接をする際にはUPIの中でも「抑うつ傾向」の得点が高い学生に関して、従来の学校生活への不適応予防、自殺予防などの対応に合わせて、学業に関する心配事の聞き取り、継続面接の中での積極的な動機付けなど学業への定着支援を積極的に行っていく必要であるのではないだろうか。また、「強迫傾向・対人関係念慮」の得点が高い学生に関しては、授業に出席しているかといった行動面だけに着目するのではなく、なぜ授業に行くかといった動機付けの部分に注目しながら、授業に行くための自分なりの意味づけを模索させるような介入を行っていく必要があるだろう。学生相談を中心とする大学での学生支援において、学生をどう支援のルールに乗せるかということは最大の課題である。本研究の結果をもとにオリエンテーション時に行うUPIを活用することで、早期に不適応予防の介入が行えることと同時に、学生の個別ニーズに合わせた長期的な発達支援を行うことが可能になるのではないだろうか。

最後に、本研究では学生のスチューデント・アパシー傾向のネガティブな側面に関しての影響は見出せたものの、学業への積極的な姿勢のようなポジティブな側面に関しては、関連する要因を見出すことができなかった。これについては今後の課題としたい。

## 【今後の課題】

本研究の結果から、スクリーニングテストとして活用されているUPIから、その後のスチューデント・アパシーの傾向を予測できる可能性が示され、早期介入の指標となることが明らかになった。スチューデント・アパシーは1960年代からその存在が概念化され、現在でも学生支援の中の大きな割合を持つ。しかし、60年代と現代とでは、彼らを取り巻く環境は大きく変化している。アパシー傾向を持つ学生の行動の本質は「負けることへの過剰な不安からくる勝負や競争の場からの逃避」である。以前の大学生は、そのような逃避的行動をとっても、その孤独感から別の活動、例えばバイトやサークル活動など、に自らの居場所を外に求める行動がおきた。しかし近年は、インターネットやスマホ、SNSの普及により、現実社会からの完全な逃避が容易になってきている。外に出ることをしなくても、孤独を感じることなく、現実からはかけ離れた理想の安全基地を手に入れることができるのである。その意味で、現代のスチューデント・アパシーは以前と比べ深刻化しやすく、また回復しにくく、より早期の介入の必要性が高まっているのではないだろうか。

では、早期に介入するためにはどうしたらいいのだろうか。学校生活面での支援を考える際に、石隈(1999)は三段階の心理教育的援助サービスモデルを提唱している。三段階の援助サービスモデルとは、支援を受ける対象の援助ニーズの大きさに焦点をあて、それに合わせた支援を提供してするための指標である。一次的援助サービスは、全ての学生が対象になり、発達上の課題や教育上の課題を遂行する上での援助ニーズである。二次的援助サービスは、友人を作りにくい、学習意欲をなくしてきたなど全体の中でも特別な配慮を必要とする援助ニーズである。三次的援助ニーズとは、不登校や長期欠席、障害など特別な援助が個別に必要な場合である。学校教育の予防的援助では、対象がどの段階にいるかを早期にアセスメントし、援助ニーズの段階に合わせ支援を行い、それ以上下の段階に行くことを防ぐことが重要である。本研究の意義は、まだ問題が顕在化していないが、適切な対応をしないとこれから問題化する学生、いわゆる二次支援を必要とする学生を早期に発見し介入できるということにある。これからの大学の学生支援は、学生に関わる全ての教職員が支援者であるという自覚を持ち、このような支援モデルを共有する必要がある。その上で二次的援助サービスの必要な学生を、教職員が連携して早期にキャッチすること、そして適切な支援のルートに乗せられるような体制づくりをしていくことが課題となってくるのではないだろうか。

## 引用文献

- 石隈利紀 1999 学校心理学 誠信書房。  
石本雄真・倉澤知子 2009 心の居場所と大学生のアパシー傾向との関連 神戸大学大学院人間発達環境科研究紀要、2(2)、227-232。  
橋本泰子 2002 心理学的アセスメントによるアパシー傾向の一考察、人間科学研究、

- 24、53-66.
- 西村信子 2012 大学生のアパシー傾向に関する一考察 日本教育心理学会総会発表論文集、54、258.
- 溝上慎一 1996 大学生の学習意欲 京都大学高等教育研究、2、184-197.
- 松原達哉 2009 心理テスト法入門 第4版 日本文化科学社 177-179.
- 宮下敏恵・五十嵐透子・増井晃 2009 教員養成系大学新入生の23年間にわたるメンタルヘルスの変化 学校メンタルヘルス、12(2)、71-80.
- 文部科学省 2014 学生の中途退学や休学等の状況について 文部科学省 HP (教育：大学・大学院、専門教育に関わる報道発表、平成26年9月25日).
- 武蔵由佳・箭本佳己・品田笑子・河村茂雄 2012 大学生における学校生活満足感と精神的健康との関連の検討 カウンセリング研究、45、165-174.
- 岡伊織・吉村麻奈実・山崖俊子 2015 津田塾大学新入生における精神的健康度の変化 津田塾大学紀要、47、175-195.
- 小塩真司・願興寺礼子・桐山雅子 2007 大学退学者におけるUPI得点の特徴 学生相談研究、28、134-142.
- 下山晴彦 1995 男子大学生の無気力の研究 教育心理学研究、43、145-155.
- 下山晴彦 1996 スチューデント・アパシー研究の展望 教育心理学研究、44、350-363.
- 下山晴彦 1997 臨床心理学研究の理論と実際—スチューデント・アパシー研究を例として 東京大学出版.
- 鉄島清毅 1993 大学生のアパシー傾向に関する研究—関連する諸要因の検討— 教育心理学研究、41、200-208.
- 内田千代子 2011 大学における休・退学、留年学生に関する調査(第32報) 全国大学メンタルヘルス研究会報告書、80-94.
- 吉武光世 1995 UPIからみた新入生の心の健康状態について—他大学の比較を通して— 東洋短期大学紀要、27、33-42.
- Walters, P.A 1961 Student Apathy. Blane, G.B. Mearthre, C.C. "Emotional Problem of the Student" New York: Appleton-Century-Crofts. (笠原嘉、岡本重慶訳 1975 学生の情緒問題『学生のアパシー』 文光堂)
- 全国大学保健管理協会 1968 UPI 学生精神的健康調査. (杉原一昭・桜井茂雄・大川一郎・藤生英行・藤岡久美子 2006 発達臨床教育相談マニュアル 川島書店)

Received : October, 5, 2016

Revision received : November, 22, 2016

Accepted : December. 9, 2016